

登録年月日

令和2年8月17日

国登録有形文化財

旧群南村役場庁舎 (高崎市歴史民俗資料館)



旧群南村役場庁舎 昭和33年12月15日撮影



員数	1棟
所在地	群馬県高崎市長瀬町字西久保1058番地
構造形式	木造2階建、寄棟造、瓦葺
建築面積	451.65㎡ (1階床面積451.65㎡、2階床面積324.38㎡、延床面積776.03㎡)
建築年代	昭和33年(1958)4月5日着工、同6月23日竣工
改修履歴	高崎市群南支所及び公民館として使用するため、1階作業室部分を12.39㎡増築・間仕切変更工事(昭和43年)、外部建具を木製からアルミ製に改修工事(昭和53年)
施工	信澤工業株式会社
設計	信澤工業株式会社 深沢春雄
所有者の氏名	高崎市
所有者の住所	群馬県高崎市長松町35番地1

有形文化財(建造物)

建造物、工芸品、彫刻、書跡、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などの有形の文化的遺産で、我が国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものの総称。このうち、建造物については国が指定する国宝・重要文化財(建造物)と国が登録する登録有形文化財(建造物)がある。



建物の変遷

旧群南村役場庁舎(高崎市歴史民俗資料館)の所在する高崎市上滝町は、かつて群馬郡群南村に属していた。まず、昭和31年9月30日に群馬郡の滝川村と京ヶ島村が合併して群南村が成立し、昭和32年8月1日に岩鼻村大字綿貫・大字栗崎が群南村へ編入したが、同日に群南村大字八幡原の一部・大字宇貫を佐波郡玉村町へ編入した。同年9月1日にも大類村大字下大類・柴崎の一部が編入したが、同年10月15日に群南村大字板井を佐波郡玉村町へ編入した。

役場庁舎は当初、旧京ヶ島村役場を使用していたが、新たな庁舎は新村のほぼ中央に位置する主要地方道高崎伊勢崎線と主要地方道前橋長瀬線の交差点から100mほど東の交通の便利な当地が選定され、昭和33年4月5日着工し、同年6月23日竣工された。

昭和40年9月1日、群南村は高崎市と合併し、その後、高崎市群南支所及び公民館として使用され、昭和53年10月1日から高崎市歴史民俗資料館として開館し、現在に至る。令和2年8月17日、国登録有形文化財(建造物)に登録された。

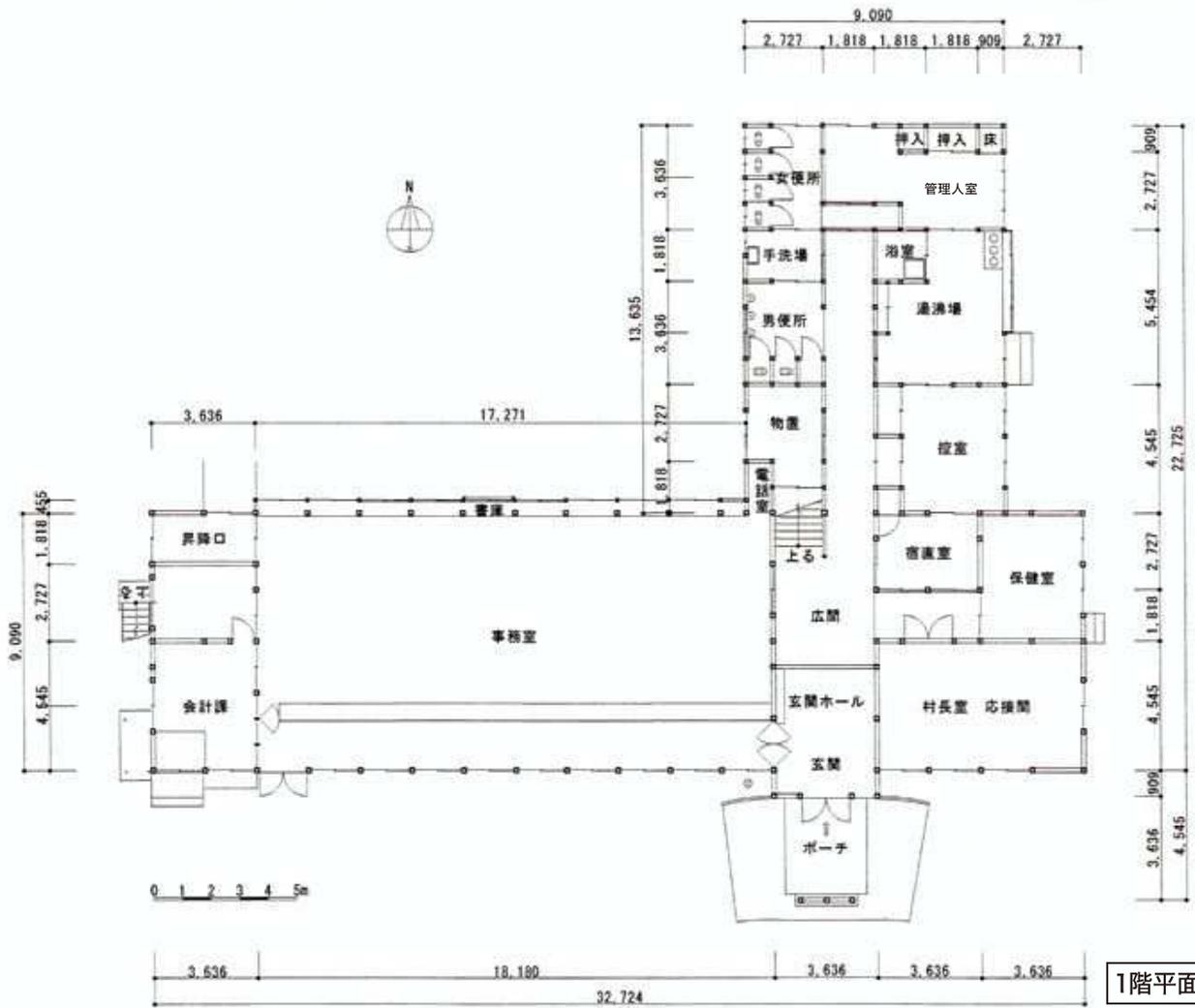
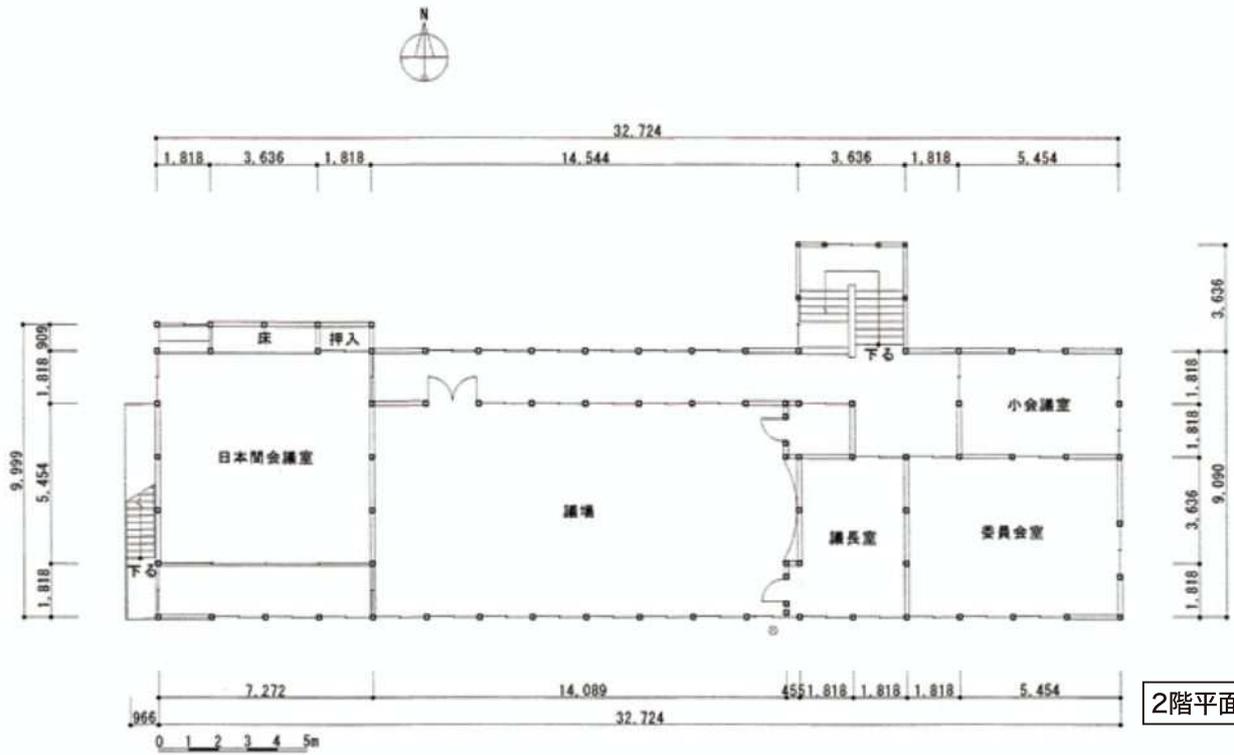
建物の概要

この建物は、木造2階建てで東西に長く、桁行18間(32.724m)、梁間5間(9.090m)の総2階。北側東寄りに桁行7.5間(13.635m)、梁間5間(9.090m)の平屋が付く。建築面積は451.65㎡(1階床面積451.65㎡、2階床面積324.38㎡、延床面積776.03㎡)である。

ほぼ南正面に車寄と玄関が付く。屋根は寄棟で日本瓦葺、外壁はモルタル塗りリシン仕上。玄関ポーチの壁は煉瓦積など、ほぼ建設当時の仕様を保っている。昭和43年には施設の機能を充実させるため、背面1階の一部12.39㎡を増築・間仕切り変更工事を行っている。外部建具は、昭和53年10月に歴史民俗資料館となる際に、2階東側の2部屋を残し、木製からアルミサッシに替えた。

リシン仕上

モルタル外壁の仕上げ方法の一つ。細かい石を混ぜた塗料をモルタルに吹き付けるため、表面に細かい凹凸があるのが特徴。



特長

◎**柱材**は全体的に杉材が多く使用されている。2階建部分で確認できる**通し柱**(計33本)は杉材で、5寸(150mm)の角材、長さは定尺(規定の寸法)の24尺物(7.272m)の**無垢材**を使用している。現在では、この大きさの柱は**集成材**が多く使われる。

通し柱

土台から軒まで1本で通った、継ぎ目のない柱。各階を一体化させ、強度を高める。

無垢材

合板や**集成材**ではなく、使用する形状を丸太から切り出した木材。天然木本来の風合いを持つ。「正物」ともいう。

集成材

小さな板材の木目の方向が平行になるように重ね、接着して再構成した合成材。木質でも長大な構造材や湾曲材をつくることができる。

◎**腰壁**は内部階段室と議場室(現在はくらしの部屋)に、仕上材としてラワン材でリブ調に加工された音響用の内装材「**コペンハーゲンリブ**」を取付けて、吸音や残響の度合いなどの効果と多少の高級感を出している。当時、この仕上材を使った建物は多かったが、現存しているものは少なく希少価値がある。

腰壁

壁の低い部分に板材などを張りめぐらせた壁。壁の床面から腰の高さにできやすい傷や汚れに対応するための壁の仕上げ。

コペンハーゲンリブ

ラワン材でリブ調に加工された音響用内装材。曲面を取り入れた壁面材。

◎**2階の梁**は「**挟み梁**」。2階建部分の**小屋組**は、桁上に京呂組で架かる**真束**小屋組(キングポストラス)で、接合部の「**接点**」は添え板ボルト継ぎ。建物の柱間(スパン)が約9.09mあり、トラス構造で、部材が三角形を作るように組み合わせることで重い屋根を支える堅固な構造である。同時に、柱のない、広く開放的な空間を作り出している。このトラス構造が長く風雨に耐えてこられた理由の一つである。

挟み梁

2材の間に枕・支物ともいわれる**飼木**などをはさみ、ボルトなどでつづり合わせた梁。

小屋組

屋根を支える骨組みの構造。主要な柱に桁や梁を架け、梁の上に束を立てて、その上に母屋と棟木で斜面を形成し、垂木を取り付けて野地板を設置して屋根となる。

京呂組

柱の上に軒桁をのせ、その上に**小屋梁**を架ける構造。旧新町紡績所と同じ工法。

真束小屋組(キングポストラス)

トラス構造の1つで、山形のトラスの中央に**真束**と呼ばれる支柱が入ったもの。大規模な木造建築などに利用されている。重い屋根を支える堅固な構造になると同時に、柱のない広く開放的な空間を作ることができる。フランスの技術を導入した建物。世界遺産富岡製糸場と同じ工法。

トラス構造

部材を三角形につなぎ合わせた骨組構造。部材に作用する力が小さく、接合部が自由に動いて変形しにくい。細い部材でも構造物をつくることができるが、階高の高さが大きくなる。大規模空間の屋根構造に適しており、意匠的にも美しい。

◎**床材**は1階・2階とも、ほとんどの部屋と廊下、階段に**ブナ材**を貼り、現在も建築当時のままで使用されている。

◎**付書院**(出書院)のある2階の**日本間**会議室(現在は高崎城臺の間)は、床の間の採光、装飾があり建築当時のままである。

◎**外窓**^{そとまど}はアルミサッシに交換した部屋もあるが、小会議室（現在は記憶の部屋）、委員会室（現在は昔の教室）は、建築当時のままの木製建具が残っている。窓は「戸杓り」^{※とじゃく とじゃく}（戸決り）を設け、引き戸を閉めた際に、隙間が生じないように戸の厚さ分より少し広めに削った「しゃくり」^{すきま}を6mm程度彫り込み、溝に戸がわずかに食い込んで、風雨が入らないよう防止する配慮をしている。（建築当時は全ての外窓にこの方法が施行されていた）

戸杓り^{とじゃく とじゃく}（戸決り）
引戸などが柱や出入口枠の建具に当たる部分を溝き切りをすること。

◎**屋根**^{にほんかわら ※さんがわらさんがわらぶき}は日本瓦の棧瓦（棧瓦）葺で建築当時の瓦葺である。瓦の総数は約9500枚、重量は約25.5tある。この瓦は、今日まで風雨に耐えながらこの建物を維持している。

棧瓦^{さんがわらさんがわら}（棧瓦）
日本瓦。断面が波形で、隅に切り込みのある瓦。本瓦葺の牡瓦と牝瓦を一枚瓦に簡略化したもの。江戸時代以降に用いられるようになった。

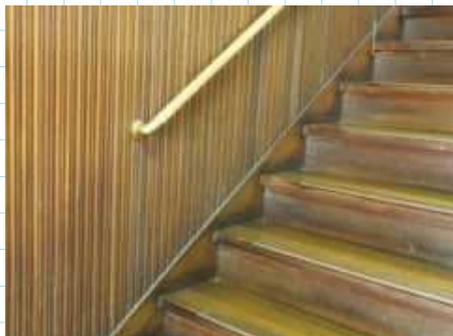
◎**建物全体**は和風建築で建設されている。構造材、内法材、下地材、内装材、床材などに木材を使用している。木材の使用量は約145㎡、重量は65t。

内部の仕上げ

玄関の床は色モルタル、一部タイル貼。腰壁はコペンハーゲンリブ貼。壁は漆喰塗、天井は吸音テックス貼、また事務室・展示室の床はブナフローリング貼、壁は漆喰塗、天井は吸音テックス貼である。なお、湯沸場として使われていた現在の「いろいろの部屋」には、竈も当時のまま残されている。階段の段板、真鍮製の滑止、木製手すり、2階和室の畳敷、壁天井のパルボイドと呼ばれる繊維系の塗壁仕上なども、改修せずにほとんど当時のままの仕上である。



玄関床（色モルタル、一部タイル貼）



腰壁（コペンハーゲンリブ貼）
階段（段板・真鍮製の滑止・木製手すり）



天井（吸音テックス貼）



かまど
竈



床（ブナフローリング貼）



2階和室（畳・壁天井パルボイド）

